

大正五～九年、多くの方々が本堂建立に向けて寄付をして下さいました。『旭川別院百年史』をもとに、当時飢饉で苦しい生活を強いられていたにもかかわらず、本堂建立にご尽力下さった方々のお名前を紹介したいと思います。

※今回だけでは書ききれませんので、数回に分けて記載します。

※当時の佛具と現在の佛具の値段を比較すると、当時の壹円は今では壹万円に相当する事が解りました。

一金 壹千参百	円也	後藤 慶治
一金 壹千貳百	円也	笠原 定蔵
一金 壹千貳百	円也	大谷 岩太郎
一金 壹千	円也	東海林 吉四郎
一金 壹千	円也	西倉 重二郎
一金 壹千	円也	齊藤 弥三郎
一金 壹千	円也	荒井 初市
一金 壹千	円也	岡田 重次郎
一金 壹千	円也	西村 玉吉
一金 五百	円也	河合 菊治郎
一金 五百	円也	山田 新
一金 参百	円也	掛場 市左工門
一金 参百	円也	城 政吉
一金 参百	円也	米本 栄治郎
一金 参百	円也	福田 小治郎
一金 参百	円也	赤坂 利作
一金 貳百五拾	円也	林 徳太郎
一金 貳百五拾	円也	吉竹 鶴吉
一金 貳百貳拾五	円也	小林 助太郎
一金 貳百拾五	円也	善浪 善太郎
一金 貳百	円也	細川 藤治郎
一金 貳百	円也	辻 仁一郎
一金 貳百	円也	畦池 寅吉
一金 貳百	円也	阿部 武助
一金 貳百	円也	西村 初太郎
一金 貳百	円也	石川 卯之助
一金 貳百	円也	松永 音三郎

皆様からのご連絡お待ちしております。
次回もお楽しみに(^_^)!

調査員：草部・垣原・横井よ・高橋
平成22年6月1日制作

別院しらべ隊

調査報告書No.6 屋根に乗せる想い

屋根の歴史

屋根は、生活している私たちを雨・露・風・雪・寒・暑・埃から守る覆いとしてできたものだと言われています。その素材は堅穴住居の草葺きに始まり、葦や茅等の茎の部分を使った茅葺き、樹皮を使った桧皮葺き、スギ・サワラ等の木を薄くした板を使った桤葺き（柿葺き）と発展していきます。

飛鳥時代、仏教が日本に伝来した頃、百濟から僧・寺工・画工・鑪盤博士・瓦博士が渡来し、法興寺（飛鳥寺）を建立したと『日本書紀』に残っています。茅葺きや桤葺きが主流だった当時、粘土を焼いて造る瓦は最先端の技術であり、それを扱う職人を博士と呼んでいました。瓦葺きは寺院建築のみに見られ、国分寺の建築にあたり全国に普及していきました。

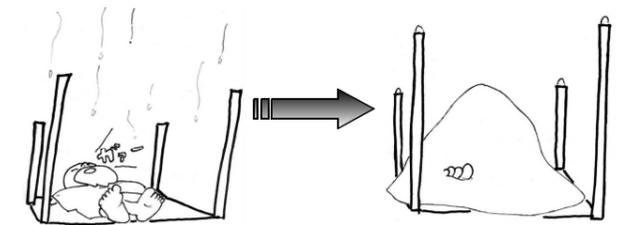


安土桃山時代・戦国時代に入ると城が各地で建てられるようになりました。桧皮葺きの城では火に弱く、城としての機能が果たせないことから、寺院建築に限らず、城郭建築にも瓦が使われるようになりました。

江戸時代中期になると一般家屋に瓦を使用できるようになり、現在に至っています。

北海道に於いては、1800年頃本州から開拓者が入ってきました。雪の対策として桤葺き屋根を使用していました。北海道では雪の重みや凍結で瓦が割れたり、瓦の重みと雪の重みで建物が潰れたり、北海道の厳しい自然環境では瓦は適用しないとされてきました。桤葺きであっても、薄い木を貼り合わせているだけであるため火に弱く、火災が起こってしまうと燃えた木くずが広がって他の家に燃え移ってしまいます。これを回避するため、屋根を鉄板で覆い防火対策としました。現在でも北海道住宅の多くがトタン屋根です。

※地域によっては開拓時代から瓦を使用している建物が現在も残っています。



鬼瓦・鬼板・鷗尾・鯨

大棟・降棟等の末端に雨仕舞と装飾を兼ねて置くものを鬼瓦といい、他には目的は同じですが、鬼板・鷗尾・獅子口等と名称が異なるものもあります。鬼瓦はその名の通り、鬼の顔をかたどっています。室町時代以前では鬼ではなく獣の顔であったとされています。角が飛び出していたり、顔の輪郭そのものの凹凸であったり、その時代の職人の技が見えます。しかし鬼瓦でありながら鬼面・獣面でないものも鬼瓦と称することがあります。



鬼板も鬼瓦と同じですが、一つ異なる点があります。素材が瓦であれば鬼瓦、素材が瓦以外のもや、獣面ではなく「平たい」ものが鬼板といます。旭川別院の大棟にあります。

鷗尾は、その形から「沓形」とも言われます。起源は解っておらず、海中に棲み雨を降らす魚であるとか、鰐であるのか龍であるのか解らぬインドの想像上の動物である摩伽羅であるとか、とにかく水に関係をしていて火伏せの意味を持っており、飛鳥時代の瓦と共に伝来し寺院・宮殿等の主要建築の大棟を飾っていました。代表的なものとして東大寺や唐招提寺のお堂の屋根に見えます。

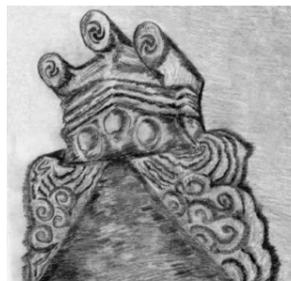


鯨は、主に城の大棟に飾られている。明らかに魚類であり、反り返って荒々しい姿をしています。鷗尾と同じように火伏せの意味を持っています。名古屋城天守閣の金鯨が有名です。



獅子口

獅子口は鬼瓦と同様、大棟・降棟などに使われる棟飾りの一種です。特徴は、鬼瓦には鬼面や獣面のような装飾がありますが、獅子口には鬼瓦のような装飾があるわけではなく、本体はおよそ五角形で見た目は将棋の駒のような形をしています。装飾を目的とした鬼瓦は1枚の瓦から造られているのに対し、重しとしての役割も持つ獅子口は外見からは1枚の瓦に見えますが、巴の紋が入っている巴瓦など複数の瓦を組み合わせてこの形をとっています。



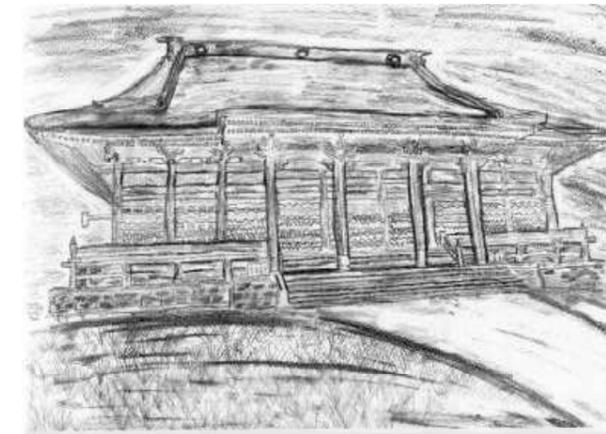
東本願寺御影堂大棟獅子口は、高さ4メートル・幅4メートル・重さ3トンにもなり、大きさに目を奪われるばかりです。しかし、獅子口の由来は明確にはなっていません。

獅子口を使用している代表的な建物には京都御所があります。御所の中でもっとも重要な建物である紫宸殿に獅子口が飾られていることから紫宸口と表現することもありますし、御所で使用しているため獅子口を別名「御所瓦」とも呼んでいます。

獅子口について調べていくうちに、先達たちの御苦労・願いが目に浮か

んできます。東本願寺建設当時（明治時代）機械など無くすべてが手作業で、危険を顧みず当時最高の建造物を現在の私達にまで残してくださいました。これは、ただ単に最高の建造物ということではなく、建物と共に先達の願いを残していく「要」としての獅子口（ささえ）だったのではないのでしょうか。

獅子口が本来、真宗寺院にある事が正しいかどうかは分かりません。巴瓦一つにしても、木造建築にもっとも恐れられる火災が起こらない様にと、渦巻きの水流を表していることは、真宗の教えではありません。しかし、最高の寺院を私達に残して行きたい、先達の願いを途絶えさせたくないという想を、今を生きる私達自身も受け止めて、さらには後世に伝えていかなければならないのでしょうか。



報告！！

別院しらべ隊 No.5 に棟札について載せさせていただきました。その際、何名かの方の所在が明らかになっていませんでしたが、しらべ隊調査員の基に報告がありました！！

発見した棟札表側に名前が載っていました、上木彌一郎さんの親族の方が、今は亀谷さんというお名前になって旭川市内に在住しておられます。上木さんは娘さんしかいなかったため、その娘さんが嫁いでしまったので棟札には載っている上木さんという名字の方は現在存在しておられないとの事です。また、上木彌一郎さんは旭川別院建設当時、木材関係の仕事をされており、お寺に熱心に通っていたそうです。

今後新たに発覚した事が有りましたら報告させていただきます。

ご連絡ありがとうございました！